論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　田中　大介

田中大介氏の論文「葬儀業のエスノグラフィ：現代日本の葬儀業と葬儀サービスに関する人類学的探究」は、現代日本の葬儀業について、人類学的なエスノグラフィ（民族誌）の手法により記述、分析したものである。本論文におけるデータは、主に東京都杉並区の葬儀社ニチリョクにおいて、雇用契約を締結し、常勤従業員の立場で現場作業に従事するという参与観察調査の方法により、2004 年 7 月から 2005 年 8 月まで田中氏が実施したフィールドワークによって得られた。また、この集中調査に加え、1 都 2 府 14 県にまたがる国内各地の葬儀社、関連業者、各種団体、地方自治体、宗教法人などに対しても調査を行っている。

以下に、本論文の各章ごとの概要について述べる。第 1 章では、序論として、死の儀礼と産業の結びつきに関する先行研究をレビューしつつ、本論のテーマである現代日本の葬儀業への視座について論述し、本論を文化的実践としての葬儀業の役割を描き出す試みとして位置づけている。第 2 章では、日本における葬儀業の歴史的展開について述べ、葬儀業の誕生から今日に至る過程を跡づけている。この作業を通して、現代日本における葬儀業という産業カテゴリーの歴史的な位置づけを行っている。

第 3 章から第 6 章までは、各々の主題に沿った葬儀業と葬儀サービスに関する具体的な事例が描写されている。第 3 章では、現代日本における葬儀業界を概観し、サービス業としての葬儀業の市場、業界団体、業種間ネットワーク、業者間の力関係など産業構造上の特質を論じている。第 4 章では、葬儀社ニチリョクでの参与観察調査をもとに、葬儀社の日常活動に焦点を当て、その仕事を成り立たせているさまざまな要素をフィールドノートの記録に基づいて微視的、民族誌的に検討している。第 5 章では、葬儀業の現場におけるサービス開発の機制を記述し、現代葬儀にみられる新しい動向に光を当て、儀礼空間（祭壇）がさまざまに演出され、消費者の好みに応じた葬儀がつくられていく様相を検討している。第 6 章では、現代社会において葬儀業が請け負っている新たな役割としての「ケア」（デスケア、遺体ケア、グリーフケア）に焦点を当て、今日の葬儀業の業務の広がりを検討している。

第 7 章では、各章で提出された論点を整理し、序論で示された問題意識に立ち返って、論文全体の理論的考察を行っている。とくに葬儀業におけるさまざまなイノベーションに着目し、それを葬儀における新たな価値と意味の追求として捉えている。また、葬儀業が文化に対して能動的かつ創造的に働きかけて、新しく「葬儀をつくる」という側面に注目し、それを文化資源論の観点から説明している。最後の第 8 章では、本論を総括して、今日における葬儀業の役割とは、慣習と伝統の反復というより、消費者の需要に呼応して、新しい文化の様式を生産することであると結論づけている。

以上の構成を持つ本論文の意義は、第 1 に、葬儀の産業化、あるいは儀礼と産業の結びつきというテーマを葬儀社での参与観察調査に基づいて、詳細かつ具体的に追求し、現代日本の葬儀のエスノグラフィとして示したことである。この種の研究は従来ほとんど行われておらず、現代日本社会研究の空隙を埋めるきわめて貴重な貢献である。

第 2 に、これを通して人類学における儀礼研究の伝統と産業研究の試みをつなぐ新たな研究領域を開拓したことである。これにより葬儀のような「儀礼」が現代において新しいかたちで再生産されていく様相を現代文化のダイナミズムの中で捉えることに成功した。

第 3 に、そのような「文化産業」としての葬儀業が「葬儀をつくる」側面を文化資源論の視座を踏まえつつ明らかにし、現代日本の葬儀が葬儀産業と消費者との相互作用の中から作り出されるものであることを実証的に示した。

審査においては、本論文での議論の仕方、とくに宗教職能者である僧侶や寺院の位置づけや葬儀業と消費者の関係の捉え方をめぐって批判的なコメントも提出された。しかし、本論文の持つ価値は十二分に高いものがあり、本論文は文化人類学の研究に対して重要で貴重な貢献をなしていると判断された。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。